色彩教材研究会通信　No.361　2023.10.26
発行人：永田泰弘
nagataya@jcom.zaq.ne.jp

言葉凸凹　等色と条件等色

「等色」とは、二つの色刺激が等しいと知覚するか、又は等しくなるように調節することを表す言葉である。判りやすく表現すると「分光分布曲線が同じ色」ということである。

それに対し「条件等色（メタメリズム）」は分光分布曲線の異なる二つの色刺激が、特定の観測条件で等しい色に見えることを示す言葉である。逆に言うと観測条件が異なると、等しい色に見えないことを示している。

ここで言う観測条件とは、照明光の違いを指している。例えば、ある黄と、分光分布の異なるＡとＢの２色の青の顔料を用いて、同色のに見える二つの緑を作ることを想定し、ある照明光下で混色作業をして等色する。

ＡとＢの青の分光分布が異なる場合は、混色した時の照明光下では等色しているが、照明を変えると色の見えの差が生ずる。このような場合を条件等色という。

染料や顔料などの色素は、その化学構造によって分光分布が異なるために、照明条件が変わると違った色に見えて、色違いのトラブルが起こる。

条件等色の確認には、分光測定を行うか、複数の照明下で確認することによってトラブルを避けるようにする。（永田泰弘）

● 万葉集のなかの色名 - 3

ありつつも　君をば待たむ　うちなびく
　わが黒髪に　霜の置くまで
磐姫皇后（巻 2-87）

居明かして　君をば待たむ　むばたまの
　わが黒髪に　霜はふるとも
磐姫皇后（巻 2-89）

丹生（にう）の河　瀬は渡らずて　ゆくゆくと
　恋痛きわが弟　こち通い来ね
長皇子 (巻 2 -130)

青駒の　足掻を速み　雲居にそ
　妹があたりを　過ぎて来にける
柿本朝臣人麻呂（巻 2 -136)

青旗の　木幡の上を　かようとは
　目には見れども　直に逢はぬかも
天智天皇の太妃（巻 2 -148)

万葉集は、ひらがな・カタカナが無い時代の歌集なので、漢字を代用した万葉仮名が用いられていたが、現代の漢字表現と同じ文字を使うことができ、発音と意味が確立していた言葉も存在した。「黒髪」、「丹生」、「青駒」、「青旗」はその例である。基本的な色名は、完成した日本語になっていたと考えられる。

「丹生の河」は真朱作りに関連した川の名前である。にうと読む。

＊講談社文庫・中西進・万葉集から（永田泰弘）

●大辞泉ひろいよみ　40 一か

灰白色：灰色を帯びた白色。
開白：かいびゃく。法会または修法の初めに、勧請の本尊に祈願の趣旨や事項などを申し述べること。表白。啓白。
顔色：顔の表面の色。血色。感情の動きの表れた顔のようす。顔つき。機嫌。
加賀染め：加賀絹を染める方法。また、その染物。梅染めを何度も繰り返した黒梅染や、加賀友禅など。加賀兼法。染め色の名。黄みを帯びた赤色。
柿色：柿の実の色に似た、黄色を帯びた赤い色。柿の渋で染めた色。赤茶色。弁柄に少し墨を入れた暗褐色の染め色。
書絵：かきえ。筆で書いた絵。肉筆の絵。摺り絵や押し絵に対していう。
柿紙：柿色をした紙。柿渋を引いた紙。渋紙。
かきそ：柿衣、柿麻。柿の渋で染めた、赤茶色の衣服。江戸時代、酒屋の奉公人の仕着せに用いられた。かき。柿の渋で染めた布の色。
柿染：柿色に染めること。また、染めたもの。
杜若・燕子花：かきつばた。古くは花汁で布を染め書き付け花と呼ばれたという。襲の色目の名。表は二藍、裏は萌葱、一説に、表は薄萌葱、裏は薄紅梅。
柿紅葉：柿の葉が紅葉すること。（永田泰弘）

●原稿募集中：この通信の原稿を募集しています。タイトル 15 字以内。本文 480 字以内。写真は一枚以内（要文章削減）。送信先：右上。